第39回

喜多流 青年能

巴　佐藤寛泰

土蜘蛛　狩野祐一

平成28年5月21日(土)

◆13:00開演(12:15開場)◆

十四世喜多六平太記念能楽堂

主催:公益財団法人　十四世六平太記念財団

後援:品川区・品川区教育委員会

チケットご購入のご案内

一般4,000円(前売3,500円)/学生2,500円(前売2,000円)

発売日:平成28年2月28日(日)

インターネット　24時間対応/要事前登録(無料)

喜多能楽堂ホームページ

http://kita-noh.com/

【お受取り・お支払い】

①セブンイレブン

ご予約の際画面に表示された番号をレジにご提示の上チケットをお受取りください。お支払いは現金またはクレジットカードをご利用いただけます。ご予約の際クレジットカードで先にお支払いを済ませていただくことも可能です。

②窓口(喜多能楽堂事務局)

クレジットカードでお支払いの上(ホームページでのWeb決済)、ご予約の際画面に表示された番号を窓口にご提示の上チケットをお受取りください。現金でのお支払いはできません。

電話予約　午前10時～午後6時/休館日あり

喜多能楽堂事務局　TEL 03-3491-8813

【お受取り・お支払い】

①セブンイレブン

ご予約の際お伝えする番号をレジにご提示の上チケットをお受取りください。お支払いは現金またはクレジットカードをご利用いただけます。

②郵送

チケット代金を指定の郵便振替口座にお振込みください。入金確認後、チケットをお届けいたします。

③窓口(喜多能楽堂事務局)

ご予約の際お伝えした番号を窓口にご提示の上チケットをお受取りください。お支払いは現金のみとなります。

窓口　午前10時～午後6時/休館日あり

喜多能楽堂事務局　TEL 03-3491-8813

【お受取り・お支払い】お支払いは現金のみとなります。

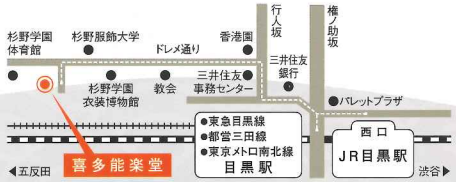
＊ご注意＊

- 開演中の途中入場はお断りいたします。
- 未就学児童のご入場はご遠慮ください。
- やむを得ない事情により出演者が変更になる場合がございます。
- 許可なき写真・ビデオ撮影、及び録音はお断りいたします。
- 客席での携帯電話やスマートフォンなど音や光の出る電子機器のご利用はお断りいたします。
- ロビー・見所でのご飲食はできません。2階ラウンジをご利用ください。
- 喜多能楽堂は全館禁煙です。屋外喫煙所をご利用ください。
- お席を離れる場合は貴重品、お手回り品にご注意ください。盗難・紛失についての責任は負いかねます。コインロッカーもご利用ください。
- 係員の指示に従っていただけない際には退場していただく場合がございます。

十四世喜多六平太記念能楽堂

〒141-0021　東京都品川区上大崎4-6-9

tel.03-3491-8813



JR線・東急目黒線・都営三田線・東京メトロ南北線ともに目黒駅より徒歩7分。目黒駅西口よりドレメ通りを直進。杉野学園体育館手前を左に入る。

お客様専用駐車場はございません。お車でのご来館はご遠慮願います。

次回喜多流青年能予告

平成28年9月24日(土)11:15開場/12:00開演

能「巻絹」佐藤　陽

能「六浦」谷　友矩

能「鵜飼」高林昌司

ほか狂言・仕舞

番組

仕舞

俊成忠度（クセ）　高林昌司

松山鏡　佐藤陽

能

巴

後シテ（巴の霊）
前シテ（里女）　佐藤寛泰
ワキ連（従僧）　矢野昌平
ワキ（旅僧）　村瀬提
ワキ連（従僧）　村瀬慧
アイ（粟津の里人）　山本凛太郎
後見　中村邦生　佐藤陽
地謡　高林昌司　内田成信　友枝真也　狩野了一　大島輝久　出雲康雅　塩津圭介　金子敬一郎
大鼓　亀井洋佑
小鼓　田邊恭資
笛　一噌隆之

狂言

文蔵

シテ（主）　山本則重
アド（太郎冠者）　山本則秀

休憩二十分

能

土蜘蛛

シテ連（太刀持）　金子龍晟
シテ連（胡蝶）　友枝雄太郎
シテ連（源頼光）　谷友矩
後シテ（土蜘蛛の精）
前シテ（怪僧）　狩野祐一
ワキ連（頼光の郎党）　矢野昌平
ワキ（独武者）　福王和幸
ワキ連（頼光の郎党）　村瀬提
アイ（独武者の下人）　山本則秀
後見　粟谷浩之　友枝真也
地謡　高林昌司　佐藤陽　佐々木多門　塩津圭介　粟谷充雄　長島茂　粟谷明生　友枝雄人
大鼓　佃良太郎
小鼓　住駒充彦
笛　藤田貴寛
太鼓　金春國直

附祝言

四時頃終了予定

巴（ともえ）

木曽の山中より旅に出た僧の二行が、近江の国琵琶湖のほとりにある粟津の原（あわづのはら・現在の滋賀県大津市）へとやってくる。僧たちが、松の木陰でしばらく休んでいると、若く美しい女性が一人やって来る。女は目の前にある神社に参って、なぜか涙を流している。僧は不思議に思ってそのわけを尋ねると、女はこの神社が木曽義仲を祀った社であると述べる。自分と同じ木曽の出の義仲が、今は神となって世を守っていることを、僧は有難く感じて神前に手を合わせる。女は、今夜この地にとどまって、御経を読んで神の五衰を慰めてほしいと僧たちに頼む。日が西へと傾き、夕暮れ時を告げる鐘の音が琵琶湖の水面に響き渡る中、女は実は自分も亡者の一人であると明かし、委しくはここの里人に聞くとよいと言い捨てて、草影に隠れ入り姿を消す。（中入）

僧たちは里人の話から先ほどの女が、義仲の愛人であり女武者として高名な巴御前であったと知る。僧たちは夜もすがら御経を読んで、彼女たちの亡き後を弔う。そこへ巴御前の霊が、ありし日の姿で甲冑を着て再び現れる。巴御前は、義仲と最期を共にする覚悟であったのに、女だからという理由で、彼にそれを許されなかった悔しさを嘆く。深手を負った義仲に形見を持って木曽に帰ることを命じられたこと、女武者としての最後の戦いの有様、義仲の最期を物語る。そして義仲の遺言に従い一人落ち延びなければならなかった無念さが執心となっていることを告げ、どうか弔ってくれと頼むのだった。

土蜘蛛（つちぐも）

数々の武功をあげ英雄となった、源頼光が病に伏している。そこへ侍女の胡蝶（こちょう）が、薬を持って見舞いに訪れる。病床の頼光は心弱げで、ありとあらゆる治療を施すも明日をも知らぬ身だと嘆く。夜深く頼光の枕元に、怪しげな僧形の者が現れる。あやしい影は頼光に病状を尋ねる。頼光が名を問うと、その影は「我が背子が来べき宵なりささがにの」と古歌の上の句を述べる。その下の句「蜘蛛の振舞いかねて知るしも」から、頼光がその影の正体が蜘蛛であると気づくと同時に、その影は千筋の糸を投げかけてくる。頼光がその場にあった膝丸（ひざまる）という刀を、とっさにとって斬りつけると、たちまち影は消え失せた。そこへ物音を聞いた独武者が馳せ参じる。頼光は先ほどの怪異を、独武者に語って聞かせる。頼光は、その影を斬りつけた膝丸の名を「蜘蛛切（くもきり）」と改める。その場には血の跡が伸びており、独武者はそれを辿って退治に出発する。（中入）

独武者が軍勢を引き連れ、その血の跡を辿っていくとやがて大きな塚が現れる。独武者の命によって軍勢が塚を壊しにかかると巨大な土蜘蛛が姿を現す。土蜘蛛から繰り出される、千筋の糸に一同は苦戦するが、大勢で切りかかり、遂には打ち倒し都へ帰ったのであった。